八つ墓村

横溝正史

八つ墓村

横溝正史

〔著者略歴〕

1902年、神戸市に生まれる。旧制大阪薬専卒。26年、博文館に入社。「新青年」「探偵小説」の編集長を歴任し32年に退社後、文筆活動に入る。信州での療養、岡山での疎開生活を経て、戦後は探偵小説専門誌「宝石」に、『本陣殺人事件』(第1回探偵作家クラブ賞長編賞)、『獄門島』、『悪魔の手毬唄』などの名作を次々と発表。76年、映画『犬神家の一族』で横溝ブームが到来。以降多くの読者の爆発的支持を得ている。81年、永眠。

本書は1971年、角川文庫より刊行されたものに、著作権継承者の了解を得た上で、章立てをいたしました。(編集部)

八つ墓村

横溝正史

1996年5月25日　初版発行

発行者／角川歴彦

発行所／株式会社角川書店

東京都千代田区富士見2-13-3　〒102　振替　00130-9-195208

TEL　営業03-3238-8521　編集03-3238-8451

印刷所／旭印刷株式会社

製本所／株式会社宮田製本所

落丁・乱丁本はご面倒でも小社角川ブック・サービス宛にお送りください。送料は小社負担でお取り替えいたします。

©Seishi YOKOMIZO　Printed in Japan

ISBN4-04-872954-3　C0093

八つ墓村（やつはかむら）

试读结束：需要全本请在线购买： www.ertongbo

目次

発端　五
第一章　尋ね人　一五
第二章　疑惑の人　三九
第三章　八つ墓明神　八四
第四章　四番目の犠牲者　一二四
第五章　鎧の中　一六〇
第六章　春代の激情　一九三
第七章　木霊の辻の恐怖　二五二
第八章　絶体絶命　二七二
大団円　三〇五
金田一耕助の事件ファイル　三〇九

発端

八つ墓村というのは、鳥取県と岡山県の県境にある山中の一寒村である。

むろん、山の中のことだから、耕地といってはいたって少なく、せいぜい十坪か二十坪ぐらいの水田が、あちらにポツリこちらにポツリあるくらいのものだし、しかも気候の関係からいって作柄も悪く、いかに食糧増産を叫んだところで、主食に関する限り、やっと村内の人口がまかなえるかまかなえないかの程度にすぎない。

それにもかかわらず村全体がわりに豊かに暮らしているのは、他に生業があるからである。八つ墓村の生業というのは、炭焼きと牛である。牛を飼うことは近年はじまったのだけれど、炭焼きは昔から、この村のもっとも主ななりわいの道であった。

八つ墓村を抱く山は、遠く鳥取県までつづいており、その山々を埋めつくして、楢、樫、櫟などの木が生い茂っているから、炭材に事欠くようなことはなく、昔からこの地方の楢炭といえば、関西地方でも有名である。

それからもう一つの生業であるところの、牛を飼うことは近年にはじまったのだけれど、いまではこのほうが、炭焼き以上に重要な村の財源となっている。この辺の牛はひとくちに千屋牛とよばれて、役牛としてよく肉牛としてよく、近所の新見で牛市が立つときには、全国から博労が集まるくらいである。

したがって村じゅうどの家でも、牛の五頭や六頭飼っていないことはないが、それらの牛は必ずしも、飼い主の所有というわけではなく、村の分限者の買った子牛をあずかって、一人前の牛に育てあげ、それを売った利益金を、定められた率で出資者とわけあうのである。つまりふつうの農村の、地主と小作みたいな関係がここにもあるわけで、こういう山中の一寒村にも、貧富の懸隔ははっきりあった。八つ墓村の分限者は二軒あって、一に田治見、二に野村。田治見家は村の東にあるところから東屋とよばれ、野村家はそれに対立する意味で西屋とよばれている。

それにしても無気味なのはこの村の名前である。

八つ墓村。――ここにうまれ、ここに屍を埋め、

代々永くこの名になじんできた人々には、別になんの奇異な感じもあたえないのかもしれないが、はじめてこの名を耳にする、他郷の人々にとっては、一種異様な名前のように思われる。何かしら無気味な曰く因縁がありそうに思われてならぬだろう。

いかにもそのとおり、そしてその因縁というのはいまから遠く、三百八十余年の昔、永禄年間に端を発する。

永禄九年七月六日、雲州富田城主尼子義久が、毛利元就に降って月山城を明け渡したとき宗徒の公達で、この降服を肯じなかった若武者一騎、七人の近習をしたがえて城を落ちのびた。伝説によると、その時一行は他日の再挙を期して馬三頭に三千両の黄金を積んでいたという。そして河を渡り山を越え、千辛万苦の末、たどりついたのがこの村であった。

はじめ村人は快く、八人の落武者を迎えた。落武者もまたこの山奥の素朴な人情に安心して、しばらくここを仮の宿りと定め、土民に姿をやつして、炭焼きなどをはじめた。

幸いここは山も深く、かくれ家に事欠くようなことはなかった。さらにまた、いざとなれば鍾乳洞という格好のかくれ場所もあった。このへん一帯の地層は、石灰岩からできているので、渓谷へおりると、いたるところに鍾乳洞がある。なかには八幡の藪みたいに、だれもその奥底をさぐったものがないという、深い洞窟もあった。それらは討っ手が押し寄せた場合、究竟なかくれ場所となるだろうと思われた。あるいは八人の落武者が、この村をしばしの宿と定めたのは、こういう地形を勘定に入れたせいかもしれない。

こうして半年あまりの歳月は、落人のうえにも平穏無事に打ち過ぎた。村人とのあいだにも、悶着は起こらなかった。

ところがそのうちに、毛利方の詮議がしだいにきびしくなってきた。そして詮議の手はついにこの山奥までのびてきた。それというのが落人の大将というのが、尼子の一族でも聞こえた豪のものであったから、そういうものを生かしておいたら、他日、どのような禍の種になるかもしれぬと考えられたからである。

落人をかくまっている村の人たちも、しだいに自分たちの立場が不安になってきた。それに毛利方の提出したほうびの金にも目がくれた。だが、それよりもかれらがもっと心をひかれたのは、馬に積んできた三千両という黄金である。落人全部を殺してしまえば、だれもこの三千両のことを知るものはあるまいと思われ

る。いや、たとえ毛利方で知っていて、黄金の詮議があったとしても、知らぬ存ぜぬ、そのようなものは見たこともございませぬと言い張れば、のがれられぬこともあるまいではないか。

村の人々はそこでよりより評議した末に、衆議一決したところで、ある日、ふいに立って落人を襲うた。落人はそのとき全部、山の炭焼き小屋に集まって、炭を焼いていたところだったが、それを取りまいた村人は、三方から枯れ草に火を放ち、まず落人の退路をたっておいて、屈強の若者たちがてんでに山刀、竹槍をふるって炭焼き小屋を襲撃した。乱世のこととて、土民たちも戦のすべは知っていたのである。

落人たちはふいをつかれた。かれらはすっかり村人に心をゆるしていたおりからだけに、この襲撃は寝耳に水だった。場所が山の炭焼き小屋であっただけに、槍刀の用意もなかった。それでもありあう鉈、斧などをふるって戦ったが、多勢に無勢で、所詮勝ちみはなかった。一人討たれ、二人討たれ、ついに一行八人、ことごとく土民の手にかかって死んだのは、まことにはかない最期であった。

村人は八つの首級をはねると、炭焼き小屋に火を放ち、勝鬨あげて引き揚げたが、言いつたえによると、八つの首級はいずれも無念の形相ものすごく、見るものをゾッとさせたということである。わけても若大将の無念はひとしおで、土民の手でズタズタに斬られ、血みどろになって息を引きとる間際まで、七生までこの村に祟ってみせると叫びつづけたというのは、いかさま、さもあるべきことであろう。

それはさておき村の人たちはこの首級によって、首尾よく毛利方よりのほうびの金にありついたが、肝心の三千両という黄金は、どうしてもありかがわからなかった。かれらは血眼になって、草の根をわけ、岩をうがち、渓谷を掘って黄金のゆくえを求めたが、ついに成功することがなかったという。それのみならず、この黄金の探索の間にいろいろ不祥の怪異があった。

あるものは鍾乳洞の奥をさぐっていたところが、突然、落盤のためにあえない最期をとげた。あるものは、岩角を掘っていたところが、ふいに崖崩れのために、足を踏みすべらし、谷底へおちて大けがをしたあげく跛になった。あるものは木の根を掘っていたところが、突然、その木が倒れてきて、無残な圧死を遂げた。

こうした怪事があいついだところへ、最後に村人を恐怖のどん底にたたきこむような事件が起こった。

八人の落武者が惨殺されてから、半年ほど後のこと

である。その年はどういうものかこの地方に雷が多く、落雷がしきりであったから、これも八人の怨念であろうかと、村の人たちも安からぬ思いにおののいていたところ、ある日、名主田治見庄左衛門宅の杉の大木に落雷して、杉の木はもののみごとに根元まで真っ二つに裂けた。

ところでこの田治見庄左衛門こそ、かの落人襲撃の発頭人であったが、あれ以来、とかく気分がすぐれず、なんとやら物狂おしい振る舞いが多かったので、家人も戦々兢々としていたところ、突如、この落雷で逆上してしまった。ありあう刀を抜きはなつと見るや、いきなり家人の二、三人を斬り倒し、家を走り出ると、いきあう村人を片っ端からなぎ倒し、おのれは山へ入って自ら首をはねて死んだ。

嘘か実か、このとき、けが人は十数人出たが、庄左衛門の一撃で死んだのは七人であり、それに自ら首をはねて死んだ庄左衛門を加えると、八人の死人が一時に出たということになり、これもあの無残に殺された八人の落武者の、怨念のなすわざであろうと人々は恐れた。

そこで人々は八人の霊を鎮めるために、犬猫同然に埋めておいた八つの死骸をとり出すと、改めてこれを丁重に埋葬し、そこに八つの墓を立て、明神とあがめ奉ることにした。これがすなわち、八つ墓村の背後の丘にある八つ墓明神の由来記で、村の名もこの明神の名前から来ている。

以上が八つ墓村に関して、遠き昔から語りつがれた物語である。

ところが歴史は繰り返すとでもいうのであろうか、近年になってこの山奥の一寒村の名が全国の新聞に喧伝されるような、一大不祥事件が起こった。そして、その事件こそ私がここに紹介しようとする怪事件の、直接の端緒となっているのである。

それは大正×年、すなわちいまから二十数年まえのことである。

東屋とよばれる田治見家の当時の主人は、要蔵といって、そのころ三十六歳だったが、田治見家にはかの庄左衛門以来、代々狂疾の遺伝があり、要蔵も若いころから、とかく粗暴残虐の振る舞いが多かった。要蔵は二十の年におきさという女と結婚して、久弥、春代という二人の子どもがあった。

要蔵は早く両親をうしなったので、二人の伯母に育てられた。したがって事件の起こったころの田治見家の家族といえば要蔵夫婦に十五になる息子の久弥、八

试读结束：需要全本请在线购买： www.ertongbo

つになる娘の春代と二人の子どものほかに、いまいった二人の伯母があった。

この二人の伯母というのは双生児で、二人とも生涯良人を持たず、いかず後家として、要蔵の両親なきあと田治見家のいっさいの采配をふるっていた。要蔵には弟が一人あったがこれは母の実家をつぐために、早くから家を出て、姓も里村と名乗っていた。

さて、事件の起こる二、三年まえ、要蔵は妻も子どももありながら、突然はげしい恋をした。恋の相手は村の博労の娘で、当時高等小学校を出て、郵便局の女事務員をしていた。年は十九で、名は鶴子。

要蔵はまえにもいったように粗暴で残虐性を持つ男だったが、その恋もまた、文字どおり火のようにはげしいものであった。一日かれは鶴子の帰りを道に擁して、むりやりに自家の土蔵へ拉しかえると、暴力をもってこれを犯した。しかもかれはそのまま鶴子を土蔵に閉じこめてかえそうとはせず、気ちがいじみた情欲の犠牲として責めさいなんだ。

鶴子はむろん泣き叫んで救いを求めた。事情を知った二人の伯母と妻のおきさが、驚いて要蔵をいさめたがかれは頑としてきき入れなかった。鶴子の両親もびっくりして駆けつけてくると、娘をかえしてくれるようにと泣きついたが、要蔵は一言のもとにはねつけた。あまりしつこく周囲のものが騒ぎ立てると、要蔵はギラギラした眼つきをして、どんな乱暴なまねもしかねまじき風情であった。

それに恐れをなした人々は、結局鶴子を口説き落として、要蔵の妾になることを承知させるよりほかにみちはなかった。鶴子はなかなかうんといわなかったが、彼女がかぶりを横にふったところで、どうなるものでもなかった。土蔵の鍵は要蔵が握っており、好きなときにやってきて、暴力をもって思いを遂げていくのである。

鶴子もだんだん考えた。こんなことならいっそすなおに承知して、要蔵の妾になろう。そうすればこの土蔵から出ることができるであろう。土蔵から出さえすれば、また、なんとか方法もあるだろう。——鶴子はそんなふうに覚悟をきめて、両親を通してその旨を要蔵に通じた。

要蔵の喜びはいうまでもない。鶴子はすぐに土蔵から出されて、離れの一棟があてがわれた。そして着物だの髪飾りだの調度類だの、いろいろなりっぱなものがあてがわれて、要蔵のかわいがりようといったらなかった。かれは昼も夜も離れに入り浸って、鶴子の肉

を愛撫しつづけた。
鶴子にはそれが恐ろしかった。聞くところによると、要蔵の情欲には、なにかしら気ちがいじみたはげしさがあって、とてもふつうの女には、受けとめかねたのであろうといわれている。たまりかねた鶴子は、いくたびか要蔵のもとから逃亡を試みた。しかし、そのつど要蔵が気ちがいのように暴れるので、村の人々が恐れをなして、鶴子のもとへ泣きついてきた。結局、鶴子はいやいやながらも、要蔵のもとへかえらねばならなかった。
そうしているうちに鶴子は妊娠して、男の子を産み落とした。要蔵は大喜びで辰弥とその子に命名した。こうして子どももできたしするので、鶴子の尻もいくらか落ち着くかと思われたが、その後も彼女は、子どもを抱いてたびたび家を抜け出した。それというのが、子どもができたのちも、要蔵のはげしい情欲には少しもかわりはなかった。いや、子どもを産んだことによって、女が完全に自分のものとなったと思いこんだ要蔵は、いよいよ増長して狂態の限りをつくした。
それに耐えられなかったのと、もうひとつ鶴子がそんなにたびたび飛び出すには、深い理由のあることを、そのころになって両親や村の人もはじめて気がついた。
鶴子にはずっと以前から、深く言いかわした男があったのである。それは村の小学校の訓導で、亀井陽一という青年だった。訓導という職務柄、二人はこの恋をよほどうまく隠していたらしい。亀井というのはこの村の出身者ではなく、他から転勤してきたものだが、この地方の地質に興味をもっているとやらで、よく鍾乳洞の探検に出かけたりしていたから、おそらく二人は、人の知らない鍾乳洞の奥で、ひそかに逢曳をつづけていたのだろうといわれている。
村の人は口さがないから、こういうことがわかってくると、辰弥の出生にもとかくのことを言い出すものがあった。
「あれは田治見の旦那の子どもではない。亀井先生の子どもなのだ」
せまい村でのこういううわさは、いつか要蔵の耳に入らずにはいない。要蔵は烈火のごとくいきどおった。愛着もはげしい代わりに、嫉妬も気ちがいじみていた。鶴子の髪の毛をとって、打つ、蹴る、殴るはまだしものこと、素っ裸にして冷水を浴びせたりした。それまで、眼の中に入れても痛くないほど、かわいがっていた辰弥の背中や太股に、焼け火箸をあてたりした。
このままでいけば子どもも自分も殺されてしまう。

——たまりかねた鶴子は、また辰弥をかかえて家を抜け出した。二、三日彼女は、両親のもとにかくれていたが、自分が飛び出したあとの要蔵の怒りを人づてにきくと、恐ろしくなって郷里を出奔して、姫路にある親戚のもとへ身をかくした。

要蔵は四、五日、酒ばかりくらって、鶴子のかえりを待っていた。いままでの例だと、鶴子が飛び出していってもたいてい二、三日もすると両親か村の総代が詫びを入れて、連れかえしてくるのであった。ところがこんどは五日待っても十日待っても鶴子はかえってこなかった。要蔵のいら立ちはしだいに気ちがいじみてきた。二人の伯母も妻のおきさも、恐ろしくてそばへ寄れなかった。こんどばかりは村の人たちも、だれひとり口をきこうとするものはなかった。

こうしてついに、要蔵の狂気は爆発したのである。

それは春のおそい山村では、まだ炬燵のいる四月下旬のある夜のことだった。

村の人たちは突然、時ならぬ銃声と、ただならぬ悲鳴に眠りをさまされた。銃声は一発にとどまらず、間をおいて二発、三発とつづいた。悲鳴、叫声、救いを求める声はしだいに大きくなってきた。何事が起こったのかと表へ飛び出した人々は、そこに世にも異様な風体をした男を見た。

その男は詰襟の洋服を着て、脚に脚絆をまき草鞋をはいて、白鉢巻きをしていた。そしてその鉢巻きには点けっぱなしにした棒型の懐中電燈二本、角のように結びつけ、胸にはこれまた点けっぱなしにしたナショナル懐中電燈を、まるで丑の刻参りの鏡のようにぶらさげ、洋服のうえから締めた兵児帯には、日本刀をぶちこみ、片手に猟銃をかかえていた。村の人々はそれを見ると、だれでも腰を抜かさずにはいられなかった。いや腰を抜かさぬまでも、そのまえに男のかかえた猟銃が火をふいて、ひとたまりもなくその場に撃ち倒されてしまった。

これが要蔵だった。

かれはまず、そういう風体で、一刀のもとに妻のおきさを斬って捨て、そのまま狂気のように家を飛び出したらしい。さすがに二人の伯母や子どもたちには手をつけなかったが、その代わり、罪もない村の人たちを、当たるを幸いと、あるいは斬り捨て、あるいは猟銃で狙撃して回った。

後で調べてわかったところによると、ある家は表をたたいて訪れる声に、何気なく主人が、大戸をひらいたところをいきなり外からズドンと狙撃された。また、

ある家では新婚の若夫婦の寝入りばなを、雨戸を一寸ほどこじあけて、そこから突っ込んだ銃口で、まず花婿を撃ち殺し、物音に驚いてとび起きた花嫁が壁際まで逃げていって、助けてくれと手を合わせているところを、ズドンと一発やったらしい。手を合わせたまま死んでいる若い嫁の姿勢が、駆けつけてきた係官の涙をしぼった。しかも、この花嫁のごときは、つい半月ほどまえ、十里ほど向こうの村から嫁入ってきたばかりで、要蔵とは縁も由縁もない女であった。

こうして要蔵は一晩村じゅうを暴れまわったあげく、夜明けとともに山へ逃げこみ、ようやくにして恐怖の一夜は明けたのである。

翌日、急報によって近くの町々村々から、おびただしい警官や新聞記者が押し寄せてきたときには、八つ墓村は血みどろになっていた。あちらにもこちらにも血にまみれた死体がころがっていた。どの家からも瀕死のうめき声が洩れた。まだ死にきれないで助けを呼んでいるものもあった。

そのとき、要蔵によって重軽傷をおわされたものは数知れなかったが、即死したものは三十二人、実に酸鼻を極めた事件で、世界犯罪史上類例がないといわれている。

しかも、山へ逃げこんだ肝心の犯人要蔵はその後ついに行方がわからずじまいである。むろん、警官や消防隊、村の若者たちによって、組織された自警団等によって、付近の山々峰々は隈なく捜索された。鍾乳洞もかたっぱしから奥がさぐられた。それらの捜索は幾月も幾月もつづけられた。しかし、要蔵のありかはついにわからずじまいであった。もっとも、かれがかなり後まで生きていたらしい証拠はいろいろ発見されている。牛が射殺されてところどころ肉がもぎとられているのが発見されたのである。（ここいらの牛は、冬じゅう牛小屋につながれているが、春とともに山へ放たれるのである。牛は野草を食って、幾日も幾日も山から山へとさまよい歩き、どうかすると鳥取県のほうまで行っていることがある。そして、半月に一度か一月に一度、塩がほしくなるとノコノコ山をくだって、飼い主のもとへもどってくるのである）そしてそのそばに、火薬を爆発させて火をおこし、肉をあぶって食ったらしい痕跡も残っていた。

このことは、山へ入った要蔵が、自殺する意志など毛頭なくて、生きられるだけ生きようという強い執念を物語っており、村の人たちを新たなる恐怖にたたきこんだ。

要蔵の消息はいまもってわかっていない。いくらなんでも山へ入って二十数年、そんなに長く生きていられるはずがないというのが常識的な判断だが、村人のなかには、頑固にそれを否定しつづけているものも少なくない。しかも要蔵生存説の根拠というのが、かなり滑稽なものであった。

あの際、要蔵によって即死せしめられた者は三十二人であった。三十二という数字は八の倍数に当たっている。すなわちあれは八つ墓明神の八つの墓が、四つずつの生贄を要求されたのだ。だから要蔵が死んだとすると、生贄がひとつあまるわけだというのである。そして、その説を主張する人は、きまって最後にこう付け加える。

「二度あることは三度ある。田治見の先祖の庄左衛門さんと、こんどの要蔵さんと二度まであんなことがあったからには、いずれまたもう一度、ああいう恐ろしい、血みどろな事件が起こるにちがいない」

八つ墓村ではいまでも子どもが悪くむずかると、懐中電燈の角を生やした鬼が来るぞとおどすのである。すると子どもたちは親からきいた、白鉢巻きに二本の懐中電燈をさし、胸にナショナル・ランプをぶらさげ、兵児帯に日本刀をぶちこみ、片手に猟銃をかかえた鬼の姿を思い出して、いっぺんに泣きやむということである。それは八つ墓村の人たちに、いつまでも残る悪夢だった。

それにしても要蔵逆上に、直接関係をもつ人々はどうしたろうか。不思議なことには、あの際要蔵に殺傷されたのは、たいてい要蔵鶴子の一件に、かかりあいのない人々ばかりで、実際に関係のある人々はおおむね助かっている。

まず、要蔵がもっとも憎んだであろう訓導の亀井陽一だが、かれはその晩、隣村の和尚のところへ碁をうちに行っていたので、危うく難をまぬがれた。しかし、さすがに村人の思惑を考えたのか、事件の後間もなくどこか遠いところの学校へ転勤していった。

つぎに鶴子の両親だが、かれらは騒ぎをきくといちはやく事情を察して、裏のわら小屋のわらのなかへ身をひそめたので、これまたかすり傷ひとつ負わなかった。

さらにこの騒ぎをひき起こした張本人ともいうべき鶴子親子は、まえにもいったとおり姫路の親戚のもとへ逃げていたので、これまた助かったことはいうまでもない。

彼女は騒ぎがあった後、警察に呼びもどされて、し

ばらく村へかえっていたが、なんといっても村人の彼女に対する恨みは深かった。彼女さえおとなしく要蔵のきげんをとっていたら、こんなことにはならなかったのに——と、親を失い、子どもを殺された遺家族の憎しみは強かった。

それにいたたまれなくなったのと、もうひとつ、要蔵がひょっとすると、まだ生きているかもしれぬという恐怖に駆り立てられて、鶴子は間もなく、当時二つになっていた子どもを抱いて、村を出奔してそれきり消息がわからなくなった。

こうして二十六年の歳月が流れて、昭和二十×年。二度あることは三度あるという故老の言いつたえのとおり、八つ墓村には、またしても、怪奇な殺人事件があいついで起こったのである。しかもこのたびの事件では、まえの二つの事件のような激情的な突発事件ではなく、妙にネチネチとした、えたいの知れぬ殺人があいついで起こったのだから、八つ墓村はなんともいえぬ、無気味な恐怖のなかにたたきこまれたのであった。

さて、まえおきがいやに長ったらしくなったが、それではいよいよ物語の幕をあけることにしよう。なお、そのまえに断わっておくが、以下諸君の読まれるところのものは、この物語のなかで重要な役割を演じた、関係者の一人が書いたものなのである。私がどうしてこの手記を手に入れたか、それはとくにこの物語の筋に関係がないからここには書かないでおく。

试读结束：需要全本请在线购买： www.ertongbo